右のこしかき、旅の世に身を捨て、苦を玄のがば、終に安樂の國にのぞまむ心を會得せり、三人輿にさへ遠路はかなひがたき、さしあはせの苦行、あぢきなくぞ侍る、

〔嬉遊笑覽二下器用〕三十二番職人歌合、船人と輿舁とつがひたり、○略中　三人輿は、今かごかきの三枚肩、さし合せは、今さしになひ、又省きてはさしともいふ、

〔倭訓栞前編三十八利〕りきゑや　東鑑に力者と見えて、中間にならべり、大諸禮に輿かきの類にいへり、

〔庭訓往來扶翼乾〕夫力者　貞丈云、○略中　力者トハ古代ハ力者トテ、剃髮シタル中間ノヤウナルモノアリ、出張頭巾ヲカブリ、白布ノ狩衣袴ニ脚絆シテ、馬ノ口ニモツキ、馬ビサクナドヲ持、長刀ナドヲ持チ、輿ナドヲモ舁ク者ナリ、短刀ヲ腰ニサス事、俗人ノ如シ、剃髮ノ人夫也、後三年合戰ノ繪ニ、義家凱陣シテ歸路ノ行粧ヲ畫タルニ、力者兩人、馬ノ口ノ左右ニ立タル體見タリ、紺ノ出張頭巾ヲカブリタリ、一人ハ柄長ビサクヲ持タリ、古門跡方ニモ、力者ニ輿ヲ舁セラレシ事、舊記ニ見タリ、室町將軍モ、式正ノ時ハ、力者ニ輿ヲ舁セラレシ由、古記ニ見タリ、

〔梅園日記四〕ろくゑやくは。ろくゑやく。

ろくゑやくは力者を訛れる也、力者の輿舁事は、長谷寺觀音驗記、杉原本保元物語、法然上人繪詞、類聚大補任等に出たり、吾妻鏡、嘉禎四年二月十七日、又仁治二年十一月四日、又建長四年四月一日等の記に、御輿御力者三手とあり、康正二年慈照院殿○足利義政　八幡社參記を見れば、三手は十八人なり、乘輿の力者十八人の事、荒曆、至德二年八月廿七日に出たり、さて六人を一手とすることは、六人にて輿かく事あればなり、○略中　また驢驢嘶餘云、門跡御輿舁、八瀨童也、十二人を一結といふ也とあり、○略中　天龍寺臨幸私記に、三百年來、佛法日衰、似沙門形、而非沙門者多矣、田樂法師、力者法師等是也とあり、按ずるに、此記は崇光院の觀應元年庚寅に、夢窻國師の作也、三百年前は後冷